

木組みの街の日常

イッチー団長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ココアやチノ達が住んでいる街の、何でもない日常を描いた短編集です。

キャラ設定などは基本原作準拠ですが、若干百合要素強めかなと思います。

二次創作歴が短いので、駄文などでしょうか大目に見て下さい。

目次

春の陽気のように

1

春の陽気のように

「ココアさん、ココアさん。いい加減起きて下さい」

よだれを垂らしただらしない寝顔を見せているのは、私の家に居候して学校に通っている保登心愛さん。私はココアさんと呼んでいる。

しかしこの居候、相変わらず朝に弱い。自分から起きてきたことがほとんどない。今もこうして揺さぶっているのに、全然起きる気配がない。

「まったく……」

来年は受験生になるのに、困った人だ。

(受験……それが終わったらココアさんは……)

胸の奥がチクリと痛んだ。

変わってしまうこと。ココアさんといつかお別れすること。

分かっているけれど、その時が刻一刻と近付いているのを感じる。

その時、私はどんな顔でココアさんを見送るんだろう。

「うくん……チノちゃん……」

ココアさんが寝返りを打ちながら私の名前を呟いた。一体どんな夢を見てるんだろう

う。

「ココアさん……」

彼女の柔らかそうな頬に触れる。春の朝日を浴びた頬が私の指先を温めた。

「チノちゃん……えへへ……もふもふ」

「!? ち、ちよつとココアさん!?」

ココアさんが私に抱き付いてきた。

春の陽気のような暖かさ。花の香り。何だか懐かしい気がした。

「ココアさん、離してください……離して」

「むぎゅっ!」

近くにあつたぬいぐるみを顔に押し付ける。

抱き付かれるのは別に嫌じゃないけど、やっぱり恥ずかしい。

カーテンの隙間から差し込む日の光に照らされて、私の頬も熱く火照ってしまった。

「えへへ……ごめんねチノちゃん。起こしてくれてありがとう」

寝癖を手櫛で直しながら、ココアさんは申し訳なさそうに微笑んだ。

「もう、早く朝ごはん食べて支度しちやって下さい」

「はあ〜い」

ココアさんがこの街に来てから、何度このやりとりをしたんだろう。そんなことを考えると、頬が少し緩んでしまう。

「それにしても、チノちゃんは早起きできて凄いね。自慢の妹だよ」
「妹じゃないです」

ココアさんの中では、私は妹ということになっているらしい。

末っ子だから妹が欲しかったのかな。

だとしても、私とココアさんでは全く似ていない。こんな妹で本当に良いのだろうか。

「それに、ココアさんを起こすために少し早めに起きなきゃいけないんです。まったく、手のかかる姉です」

少しツンとした言い方をしてしまう。大丈夫かな、ココアさんを傷つけたりしていいかなと心配していると、

「い、いいい今姉って言ったー!? チノちゃん、ついに私をお姉ちゃんって認めたの!？」
ココアさんが目を輝かせている。私の心配も杞憂だったみたいだ。

「認めてないです。早く支度終わらせてください」

「おっはよー、チノー!」

「おはよう、チノちゃん」

私はいつも、二人の友達と一緒に登校している。元気なマヤさんと、おっとりとしたメグさん。

「おはようございます」

春の日差しが川の水に反射して、キラキラと光っている。

最近やつと暖かくなってきた。少しだけ眠気を感じる。

「チノちゃん、何か眠たそうだね」

「またココアと夜更かししてたの？」

「またって何ですか……今日は朝ごはん作って、その後にココアさんを起こすしかあり

ませんでしたから、早起きしたんです」

「文句言ってる割にうれしそう」

マヤさんにそう言われて、頬が緩んでいることに気付いた。

「ち、違います！ これは……」

口ではそう言うけれど、実際少し嬉しいのかも知れない。

それでも素直になれないのはどうしてなんだろう……。

「ココアちゃんとチノちゃん、仲良しだもんね」

「うう……」

授業中、窓の外を眺めてみる。

暖かな陽気が私を包む。何だかココアさんを思い出した。

(つて、またココアさんのこと……)

思えば同年代の友達も少なかったから、ココアさんのことをこんなに特別に思つてしまふのかも知れない。

でも、ココアさんとマヤさん、メグさんとの違いは何だろう。

同じ友達のはずなのに、何かが違う。

暖かい空気の中で、そんなことを考えていた。ずっと考えていた。

下校中、携帯の着信音が響いた。画面を見ると、ココアさんからのメールが来たみたいだ。

『家に帰る前に、少しだけ寄り道に付き合つて(一人ー)』

「わざわざ顔文字まで付けて……」

そう言いつつも、胸はドキドキして止まらなかつた。

「ココアさん」

「あつ、チノちゃん！ ごめんね〜」

ココアさんが大きく身体を伸ばして手を振っている。

「いえ。何かあったんですか？」

「こつちこつち」

手招きされるままついていくと、そこは公園だった。

「うわあ……」

思わず見とれてしまった。夕暮れの日に染まった桃色の世界。

「桜……満開ですね……」

「綺麗でしょ。チノちゃんにも見せたくて。サプライズになった？」

「は、はい」

「地元の私にも知らない穴場を見つけてるなんて、ココアさんは凄いですね」

「あれっ!? チノちゃんが普通に褒めてくれてる!? 熱でもあるのっ!？」

ココアさんが私の額に手を当てて、熱を測ろうとしている。

恥ずかしい。あまり慣れないことは言うものじゃないなと思った。

「や、やっぱり今のは無しで……」

「つて言っても、ここ見つけたの偶然なんだ。うさぎ追いかけてたら、ここにたどり着いたの」

「何だ、ココアさんはやっぱりココアさんでしたか」

「それって褒めて……くれてるの……？」

「どうでしょうか。ふふっ……」

思わず笑ってしまう。私につられたのか、ココアさんも笑った。子供のような無邪気な顔で。

桜の花びらが舞い落ちるのを、ココアさんと二人で眺めている。

春の柔らかい夕日を浴びて落ちていくそれを見ていると、感動すると同時にどこか切なくなるのは何故だろう。

花は散るから美しいと言ったのは誰だったか。桜の咲く時期はとても短い。だから美しくて切ないのかも知れない。

「綺麗だね、チノちゃん」

「は、はい……」

いつもは子供のようだと思っていたココアさんの横顔が、一瞬だけ大人びて見えて驚いてしまう。

「綺麗ですね、本当に……」

今の私達の時間も、人生の中ではほんの一瞬なのかも知れない。だから……。

「ココアさん、ちょっと目を瞑っていてくれますか？」

「え、どうして?」

「いいですから」

「う、うん……」

だから私も後悔しないようにしたいと思った。

いつかココアさんが居なくなっても大丈夫なように。

誰もいない公園の中、心臓の鼓動だけが鳴り響いている。

「ち、チノちゃん……今何を……」

二人で顔が、桜のように桃色に染まった。

「サプライズ返しです。ふふっ……」

「え……ええっ!?!」

ココアさんがたじたじになっているのが、何だか面白い。

膝丈のスカートを翻して、ココアさんに背を向ける。

「さあ、帰りますよココアさん。お店でリゼさんが待ってますから」

「ま、待つてよチノちゃん」

ココアさんの手が私の手に触れる。

その手を握り返して、家へと帰っていった。

夕暮れの街に二人の足音が響く。暖かな風が頬に当たる。もう春真っ盛りだ。

《その後》

「遅いぞ。二人とも何してたんだ？」

「何って……ねえ……」

「ふふっ……」

ココアさんと二人、顔を見合わせて笑う。今日はやけに頬が緩んだ一日だった。

「遅刻してへらへらするんじゃない！　そこに直れ！」

「い、イエッサー!!」